家事手伝い、異世界へ行く２

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
家事手伝い、異世界へ行く２

【Ｎコード】
Ｎ６２６８Ｘ

【作者名】
Ｒａｉｌ

【あらすじ】
勇者一行に召喚されたものの無事役目を終えた主人公は元の家事手伝い生活へと戻ったのだが、ある日気がつくと再び異世界に召喚されていた。なんと今度は魔王城！？　彼女に与えられた役目とは……！？
お手軽異世界召喚第二弾です。

その１（前書き）

前回までのお話

打倒魔王を目標とした勇者一行に異世界まで呼び出された家事手伝いの主人公。彼女は重大な任務を課せられた。それは、勇者一行の食事作りであった。

魔法使いから大いなる能力を与えられた彼女は無事役目を果たし、報酬もしっかり受け取って元の生活（結構リッチになった）へと戻ったのだった。

その1

勇者一向から受け取った報酬で、単なる家事手伝いだった私はちょっとした小金持ちとなっていた。

人間お金があると趣味の幅も広がるというもので、現在私は実家を増築して大きくなったダイニングにちょっとしたバーを作っていた。

自宅でカクテルを作るというのは、ちょっとした夢だった。嘘である。親の希望だった。熱烈なプッシュだった。

その熱意に折れた私は、私の持つ宝石の出所や時々行方不明になることを見逃してもらうことにした。

我が親ながら、娘が時々ふらりと消えては宝石を持って帰ってくることに疑問を覚えなかったのだろうか。金の力って考える力を奪うんだな。

それはさておき、テレビのお供にとシェーカーを振ろうとした瞬間、今ではすっかり慣れてしまった感覚が体を襲った。

「……なんで？」

気がつくと陰鬱な城の中に立っていた。嗚呼デジャブ。

しかし目の前に立っていたのは見慣れた勇者ご一行ではなく、モノクルをかけた知らない中年男性だった。耳が尖っていて豪華めなマントを羽織っているため、ドラキュラ伯爵みたいだ。肌もやや紫がかっているし。フォン・クロロックさんですか？

「ようこそ、お待ちしておりました先生」

ドラキュラは膝をついて深々とちょっぴり頭頂部が薄い頭を下げる。何が薄いとは言わない。武士の情けだ。
それにしても、前回よりも待遇いいかもしんない。

「ええっと、一体どういうことでしょう？」

とりあえず現状確認現状確認。
私の問いかけにドラキュラは丁寧な物腰で説明し始めた。

「貴女様には魔王陛下の――」

そこでドラキュラは言い淀んだ。

「ちょっと待ってください」

思わず私は声を上げた。

「魔王陛下……って、もしかして魔族の王である魔王陛下ですか」
「左様でございます。もしかしなくとも魔族の王であらせる魔王陛下でございます」

全身からさっと血の気が引いた。

もしかして私が勇者一行の食事係をしてたってばれてる？
もしかして報復ですか。でも食事係より勇者にしようよそういうのは！

と、今にもぶっ倒れそうな私に構わず、ドラキュラは続けた。

「貴女様には、魔王陛下の食生活を中心とした生活習慣の矯正をお願いしたく……」
「……ん？」

私は首を傾げた。

「もう一度お願いします」
「貴女様には、魔王陛下の食生活を中心とした生活習慣の矯正をお願いしたく……」

一言一句違わず丁寧に復唱してくれたドラキュラには悪いが、いまいち理解できない。現実逃避しているせいかもしれない。

つまり……どゆこと？

私がさっぱり理解していないことに気付いたのか、ドラキュラは非常に沈痛な面持ちで言った。

「百聞は一見にしかずと言いますし、一度魔王陛下を見ていただけたらお分かりいただけるかと。申し遅れましたが、わたくしはウォルターと申します」

ドラキュラ改めウォルターに案内されて城の中を歩く。
魔王城というだけあって、石造りの城はカビ臭く薄汚れており、いかにも不気味な空間である。
私が内心でびくびくしているのに気付いてか、ウォルターは少々大袈裟に眉をしかめた。

「いやはや、お見苦しい限りで申し訳ありません。メイドの掃除が行き届きませんで」

「え、掃除しないのが理由なんですか」
「以前はもっと綺麗な体裁を保っていたのですが……」
ってことはメイドの職務怠慢が原因なのか。魔族でも綺麗好きなんだと思うと不思議な感じだ。
「ああ、こちらです」
そう言ってウォルターが立ち止まったのは大きい鉄製の扉の前だった。
「陛下、失礼いたします」
ノックもそこそこにウォルターが部屋の中に入る。意外とフランクだ。返事を待たなくてもいいのだろうか。
中に入った私は思わず眉をしかめた。
これまた暗くて薄汚れた印象のある部屋の中には胸やけしそうなくらい甘ったるい臭いと酒の臭いが漂っていた。
部屋の最奥部に鎮座しているのが恐らくは魔王だろう。
「うわぁ……」
黒い服やマントを押し上げる見苦しいまでの見事な脂肪。油ギッシュで出来物だらけな不健康そうな色をした肌。周囲には食べ物やら酒が溢れかえっている。
これが俗に言う百貫デブってやつですか……
「ん？　おい、ウォルター。なんだその人間の女は」

某芸人のごとく妙に甲高いキンキンした声の魔王がぎょろりとこちらに目を向ける。

「はっ、この方は陛下の食生活を中心とした生活習慣の指導をしてくださる先生でいらっしゃいます」

とても丁寧な物腰だが、私が断るという選択肢は消されているようである。

「ふん。どうせまた食事をするなだの糞まずい飯を食えだのと言うのだろう。追い返せ」

「わたくしめがお呼びいたしましたので。今回はまず陛下にご挨拶をと先生がおっしゃったので」

慇懃に嘘をつくウォルターはもしかしたら狸なのかもしれない。

しかしここは魔王の城で私を呼んだのは魔王の部下。逆らうのは得策ではない。視線で促されたので私は流れに逆らうまいと頭を下げ、

「お初にお目にかかります、魔王陛下。私は――」

「名乗りはいらん。どうせ他の連中と同じようにすぐ辞めていく奴の名前を聞いても無駄だ」

ばっさりと切り捨てられ、内心でイラッとしながらも私は口をつぐんだ。

一体これまで何人先生とやらが逃げ出したのやら。

「では陛下、わたくしと先生はこれにて失礼させていただきます」

「ああ、早く去ね」

しっしっと手を振る魔王に一礼すると、私はウォルターと共に部屋を出たのだった。

さて、応接室らしきだだっ広い部屋に場所を移した私はウォルターから詳しい話を聞くこととなった。

「――魔王陛下は十年ほど前に魔王に就任なさったのですが、数年ほど前から仕事が辛いとおっしゃって、八つ当たりのように飽食をされるようになったのです」

ウォルターはハンカチで目元を抑えながら語る。

いわゆるストレスによる過食というやつか。魔王も大変のようだ。

「それまでは見目麗しい凛々しいお姿だった魔王陛下も、何年もの過食が続いた結果、あのようなお姿に……」

あそこまで行くと、本当に元の姿が見目麗しいものだったかいささか怪しいものである。

っていうか、りっちゃんたち勇者一行が魔王倒したんじゃなかったっけ。十年前に就任して今に至るってことは、もしかして魔王って世界に何人もいるの？　魔王って自称なの？　地域別なのかな。

でも下手に聞くとやぶへびになりそうだ。

「他の連中と陛下がおっしゃってましたが、私の他にも？」

「はい。魔族の者が。ただ、陛下には合わなかったらしく」

うーん。ダイエットとか食生活の矯正って、素人には難しいもんなあ。日本でダイエット特集がしょっちゅう組まれているのもその辺が理由だろうし。

かくいう私もダイエットに挑戦しては失敗している人間である。毎日運動を続けるのも、食事の量を減らすのも大変だ。あと甘い物の誘惑。

最近は小金持ちになったのでエステを利用しているためそれほどでもないが、それでも食生活の管理には気を使っている。

「陛下の体重は日に日に増加し、今や移動が面倒くさいからとあの部屋からすら出られない状況です。あのようなお姿では部下の士気も下がります。というか使用人たちが愛想を尽かして現在もかなりの数が辞めているのです。早々に魔王様が元の凛々しいお姿に戻られなければ魔族が反旗を翻すやもしれません！　陛下の教育係であるわたくしの力が及ばないばかりにそのようなことになれば、先代の魔王陛下に申し訳が立ちません。先生、どうかお願いです。先生のお力添えを！」

紫色の手が私の手を掴む。

しかし言っておこう。

「私、人間ですよ？」

「存じ上げております」

「私、異世界人ですよ？」

「そちらも存じております」

「あちらの生活もあるんですけど」

「先生の世界との行き来はお任せください」

「報酬あります？」

「ご用意しております」

「私、プロじゃないですよ」

「大丈夫です」

何が大丈夫なんだろう。

それにまだ不安がある。

「でも私、慣れた食材じゃないと料理しにくいんですけど」

「それならばご安心ください！」

ウォルターは胸を叩くと満面の笑みで告げた。

「異世界からの壁を越えた人間には、一つ能力を付加することができます」

どこかで聞いたようなことをウォルターが言う。

今度こそ期待していいよね？

ドキドキする私にウォルターは告げる。

「貴女には、空間を貴女のご自宅の冷蔵庫と自在につなげる能力を付加しました」

「範囲狭っ」

しかもうちの冷蔵庫にピンポイントですか。

とはいえ、それが可能ならば便利なことだ。取り出しバッグならぬ取り出し冷蔵庫。うちの冷蔵庫限定ということは定期的に食材補給に帰してくれることは間違いなしだし。

なんだかウォルターの髪の毛がはらはらと抜ける幻覚が見えて気の毒になったし、引き受けてもいいかもしれない。

「分かりました。やれるだけやってみましょう」

私が言うと、ウォルターの紫色の顔が輝いた。背後に花すら飛んでいそうだ。

「ありがとうございます、先生！」

ウォルターの薄い後頭部が目にはいる。本当に苦労してるんだなあこの人。

そして、羽ばたけ！　第二回異世界召喚ｉｎ魔王城始まったのだった。

その2

さて、まずは事前の調査が大事である。
そもそも魔族の食事など私は知らない。人間と同じでいいのか、まずそこが重要だ。

というわけで、まずは魔王の普段の食事を見せてもらうことにした。

「……これが今日の食事ですか？」
「いいえ、これが本日の昼食です」

どこぞの英文法のような会話をしながら、私は自分の目を疑った。
厨房にある台の上には大きなお皿がひい、ふう、……十三枚。その上には山盛りの料理。
材料は肉、肉、魚、肉、ちょっと野菜、肉、肉。つまり肉。山盛りの肉。
十三皿のうち十枚がこってりとした肉料理、たまにある野菜は全て揚げられており、残りの三枚はデザートらしきお菓子である。これまた焼き菓子やらクリームを使った菓子やらカロリーが高そうだ。
幸いと言うべきか、教えてもらった限りだと人間の食事と内容にさほど差はないようである。高カロリーなだけだ。少し味見をさせてもらったが、味が濃い以外はやはり普通である。

「これを一食で？」
「時間にすると、おおよそ二時間ほどでしょうか」

食事時間長いよ。

「一日二食？」
「いえ、三食に加えて午前と午後に間食、そして夜食を」

つまり一日六食か。
ほぼ一日中食べてることにならないだろうか。

私は料理が運び出されるのを見ながら考えた。

ダイエットで摂食制限を行った場合、高確率でリバウンドが起こる。
元々人間の体というのは体内に取り込んだもののエネルギーを全て吸収するわけではない。しかし食事量が減った状態が続くと体が飢餓状態であると判断し、食物からの栄養吸収率を引き上げるのだ。これが最初のダイエットの停滞期となる。下手にこの時に食事量を戻すと、栄養を以前にまして摂取する結果となり、強烈なリバウンドで体重が戻ることがあるのだ。

といっても、この食事量はどう見ても食べすぎである。しかも栄養が偏っている。魔王の肌が荒れていたのもこれが原因だろう。

今後の方針としては、栄養バランスの取れた料理を今の量から少しずつ様子を見て減らしていくようにしよう。
これはかなりの長期スパンになりそうだ。
いっそ脂肪吸引でいいんじゃない？　ということは考えないようにしよう。食生活を中心とした生活習慣の改善ってウォルターに頼まれているし。

「陛下に好き嫌いは？」
「肉がお好きだと」
「嫌いなものは？」

「野菜はあまりお好きではないようです」
いかにもな偏食っプリである。っていうか、亜鉛不足になってないかな、魔王。
「でも数年前までは普通の食事だったんですよね。その時は野菜を残されていたんですか？」
「いえ、その時は普通に召し上がっていました」
ってことは、食べられないことはないのか。
「それからお酒を召されますので、そちらもなんとかしていただきたいと……」
「マジですか」
そういえば、部屋に酒瓶が転がっていたような。
「中毒にはなってませんよね」
「恐らく」
アルコール依存症を直すのは素人には無理よ、ウォルター。
そしてアルコールも太る原因なのよね。
「ところで、先ほどから気になっていたのですが……先生が手にもっていらっしゃるのは一体？」
と、ウォルターが私が持つシェイカーを見ながら言う。なんだかんだで作りかけのカクテルの入ったシェイカーを持ったまま来てしまった。

「これはカクテルを作るシェイカーです。来る前に何か軽いものを作ろうと思っていて……あ」

私は口を押さえた。

ここに来る直前に作っていたカクテルはそう、シンデレラだ。

「陛下はいつごろお酒を飲まれるんですか？」

「そうですね……食事の前にも後にも最中にも召し上がります」

つまりずっと飲んでるわけか。

とりあえず、ややぬるくはなっているだろうが私は持っていたものをウォルターに差し出した。

「とりあえずこれ、陛下に飲んでいただいて味がどうか伺っていただいても？」

シンデレラとは甘口のノンアルコールカクテル。つまりはソフトドリンクである。オレンジジュースとパイナップルジュースとレモンジュースをシェークして作ったものだ。

ジュースなのでカロリーが高いことは高いのだが、アルコールを飲みすぎると肝臓にも悪いのでまだジュースの方がましだろう。糖尿病の心配が無きにしも非ずだが、今までの食生活で大丈夫だったならまだいけるはず。

魔王が辛口好みだった場合はノンアルコールビールでももってくるとして。

「かしこまりました」

それからいくつかのヒアリングをした後、私は空間を自宅の冷蔵庫をつないだ。幸いと言うべきか、うちは大所帯である。冷蔵庫の

中身は常に満杯状態に保たれている。

目標はデザートを除いて十皿大盛り。

伊達に育ち盛りの男連中に日々の料理を供していたわけではないというところを見せてやろうじゃないか！

私は魔王のダイエットレシピを考え始めた。

さて、今後の計画やらレシピの考案やらをしていると、あっという間に夕食の時間がやってきた。

飲み物については「悪くない」とのお言葉をいただけたようなので、食中の飲み物もノンアルコールカクテルで行こうと思う。

今回は初回ということで豆腐ハンバーグやこんにゃくなどを使ったカロリー低めの料理に加え、昼に魔王が食べていたのと似たような肉料理、それから野菜炒めや冷凍食品ではあるがピラフなどを出してみた。それから野菜たっぷりの濃い味スープ。冷蔵庫の中がすっかりさびしくなってしまったので、帰ったら即刻スーパーに行かねばなるまい。

「さすが先生、お見事です」

と、ウォルターが目を細める。彼の背後には厨房の料理人である肌が青色の魔族たちがうんうんとうなずいていた。

「いえ。厨房の皆さんの手があったから出来たことです。とりあえずはこれを陛下が気に入るかどうか、ですよね」

いささか疲れながら私は言うと、ウォルターはにっこり笑った。
「よろしければ、先生も陛下と共にお食事をされては？」
え、嫌だ。魔王ってなんか怖いし。
「そんな、私なんかがそんな差しでがましい真似できません」
オブラートに包んで言うと、ウォルターはさらに嬉しそうな顔をした。
「なんて先生は謙虚な方なんでしょう。先生が引き受けてくださって、本当に感謝しきりです」
騙してるみたいでごめんね、ウォルター。

とは言うものの、魔王の反応を見ないことには食事の作りようもない。今後の献立や方針のこともあるので、魔王の食事時に同席することになった。
「……何だこれは。野菜ばかりではないか」
「健康のためでございます、陛下。それに肉料理も用意しておりますゆえ」
ウォルターが慇懃に答えている。
肉しか食べないって随分メリケンな食生活（勝手なイメージ）だ。

「まずかったらその女を即刻追い出せ」

魔王は不機嫌に言う。別にこちらとしては一向に問題ない。首をはねろなんて言わないあたり、魔王というのも意外に優しいのかもしれない。

さて、魔王はまず高級牛肉ミンチと豆腐を使ったハンバーグにフォークを突き刺した。ナイフで大ぶりに切り分けると、それをパクリと食べる。キノコ入りデミグラスソースなので割と濃厚な味付けだと思うのだが……

「ふん。悪くないな」

ぶっきらぼうにだが、魔王が言う。掴みは上々のようだ。

それから魔王は肉料理、野菜料理、スープ、ピラフと次々に平らげた。デザートのスイートポテトと寒天ゼリー、それから蒸しまんじゅうも気にいってもらえたようだ。

そういえば、昼食の時に疑問に思って聞いてみた。どうして料理を一気に運びこむのかと。だって、そうしてしまうと料理が冷めてしまう。

ところがここは魔法の世界。魔法を使って料理を常に出来たてそのままの状態で保つことができるんだそうだ。そういえば前回の勇者たちも朝食の準備をした後に料理に何か魔法をかけていた。魔法って便利だね。

その日はそれから夜食に焼きおにぎり（冷凍）とピザ（冷凍）、おからドーナツを作って終了。

まずは胃袋を掴まないことにはこちらの要求を通すことは難しいと思うので、数日は食事を提供するだけにした。
食事時以外は日本に戻り、ダイエットに関する文献も調べる予定だ。ついでに自分の分の勉強にもなるしね。

ウォルターに聞いた感じ、魔族も人間と体の作りはそれほど変わらないらしいし。

あ、それから次に来るときはドリンクもしこたま持ってこよう。カクテル用の炭酸水やジンジャーエールは必須だ。
ヒューズがくれた能力があるから調味料は必要ないけど、お米とか圧力鍋とかも持ってきたいし。ダイエット用にア●トロニック的な何かも持ってこようかなぁ。でもあれ効果薄いって聞いたような気もするし……

ともかく目指せ、劇的ビフォーアフター。

魔王が痩せて指導力取り戻したら人類ピンチじゃないの？　ということをその時の私は全く気付きもしなかったのだった。

その2（後書き）

そうして主人公はある〇るとか試してガッ〇ンとか花〇マーケットやら雑誌やらなどで得た知識を生かしてダイエットメニューを組むのであった……

その3

日本で調べて分かったことをまとめよう。

アルコールがなぜダイエットに悪いのか。

まず第一に言えるのは、酒のアルコール度数が高いものほど高カロリーだからである。

さらに酒を飲むとつまみをつい食べ過ぎてしまったり脂肪の代謝が悪くなったりするのも問題だ。ダイエットと美容の肝である代謝が悪くなるようでは今後に障る。

さらには依存性もあるので、飲みすぎるとアルコール依存病になることもある。そうなったら頭痛やら不眠やら手足の震えやら、ひどくなったら幻覚や被害妄想なんかにとりつかれる場合もある。そうなったら魔王の仕事どころか一般的な生活すら送れない。アルコール依存病は本人の意志ではいかんともしがたいものなので、未然に防止するに限る。

さらに寝酒などの習慣が身につくと熟睡するのが難しくなり、いくら寝ても体がだるいような感覚にとらわれる。

魔王がストレスで過食に走ったというのなら、快眠は欠かせないはずだ。

体調不良はかなりのストレスになるものだし。

ダイエットに運動が良いことは確かだが、人間が運動し始めてから体内に蓄積された脂肪を燃焼し始めるまでおおよそ三十分はかかるのだという。つまり、継続的な運動を三十分以上続けて初めて体

内の脂肪が減り始める。
……やってられるか！
一般人だって三十分以上のジョギングは厳しいものがあるのに、あの引きこもり魔王様が運動？　ありえない。
そもそもあそこまで太っていたら少し運動しただけでもマタ擦れが起きて大変なことになるだろう。

そこでまず目をつけたのがストレッチという方法だった。
ストレッチによって血行を促進し、代謝を高めるのだと言う。それによりダイエット効果もあるし、寝る前にストレッチをすると安眠にも効果があるとか。特に女性だと運動より十分なストレッチをした方がキレイな体になるらしいが、魔王には関係ないだろう。
キレイな魔王さんは好きですか？　……何一つ商品が売れなさそうなキャッチコピーだ。

そう言えば、日本の自宅に帰って魔王の一食分のカロリー計算を試みようとしたのだが、面倒くさすぎて諦めた。つまりは適正な量に戻せばいいんだよね！

冷蔵庫にしこたま食材を詰め込んだ私は、米を担いで色々なボトルの入ったケース引っ提げ、サプリメントとノートを詰め込んだリュックを背負って右手の指輪をこすった。
この指輪というのは、異世界と私をつなぐ道具である。ウォルターからもらったもので、指輪にはめてある宝石を決まった順序で押すとウォルター側に信号が送られる。それを受信したウォルターが私をあちらに呼ぶというわけだ。逆にウォルターから信号が送られてくるときもあり、その時は私が可否を伝えることもできる。
以前の勇者一行の時も似たようなものを貰っていたが、こちらの

方が高性能である。さすがは魔王。

というわけで。二十一世紀の日本の理論と食材、二つを引っ提げた私は魔王の食生活改善に本格的に乗り出した。

そうそう、以前りっちゃん（勇者）に呼び出された時に分かったのだが、日本の品種改良された食物というのは異世界において大変美味らしい。

基本的に天然の魚介類を除いて現代日本にある食材というのは長い時間をかけて品種改良をされている。例えばトマトに砂糖をかけて食べるという風習は、まだトマトの味が今ほど甘くなかった時の名残だ。

ところが現代ではメロンぐらい糖度の高いトマトや甘い玉ねぎ、ピーマンなど品種改良の成果は驚くべきものである。

品種改良というのは気の遠くなるような努力が必要だ。しかし一旦成功してしまえばその恩恵を現代の技術力によって享受できるというわけだ。そして私達の舌は肥えてゆく。

つまり何が言いたいかというと、現代ではおいしくないと言われているダイエット食品やトクホでも異世界に行けば美味になるのである。

ローファットのバター、ローファットのミルク、ローファットのチーズ、他多数。

それだけではない。某マイクロなダイエットとかおからとかコンニャク、寒天、豆乳、ダイエット茶、ナタデココその他諸々。

日本では早々に見向きもされなくなったダイエット用食品も、異世界へと行けば普通に美味な食材となるのだ。

「おい、次を寄こせ」
「もうゼリーは品切れです」

カロリーゼロのゼリーっていまいち味が薄いと思うのだが、魔王はお気に召したようだ。有名なコンニャクのゼリーにしようかと思ったのだが、最初からあの美味を覚えられても困るのでまだ温存している。

「使えん奴だ。酒を寄こせ。まずかったらタダじゃすまさんぞ」
「シャーリー・テンプルです」

これまた糖分ゼロのジンジャーエールとグレナデン・シロップをステアしたものを魔王に渡す。
正確に言うと酒ではないが、ウォルターから聞いた感じ魔王はザルのようだし、酒っぽい口当たりなら問題なさそうである。前のノンアルコールカクテルも大丈夫だったし。

「ふん……量が足りんぞ」

空になったグラスを魔王が掲げる。

「追加でお作りします」

これも割と気に入ってもらえたようである。

炭酸飲料だと飲んだら体の中で炭酸ガスを出して満腹感を感じるようになるので、その辺も有効活用していきたい。

時折ファ●バーミニやチョ●ラＢＢスパークリングなど食物繊維

や美容用の飲み物も出す。栄養補助食品の中でも割と美味しいものなので、魔王も普通に飲んでいるようだ。

お肌や体質の改善にはビタミンは欠かせない。

ダイエットもそうだが、綺麗に痩せないと凛々しいお姿（ウォルター談）にならないもんね。

夜食にダイエット用クッキーやらシェーキやら出した後に十分ほどストレッチを指導した私は、日本の自宅へと帰って眠りに就いた。

……でもこのダイエット計画、何カ月かかるんだろう。

その時はちょっぴり先行きが不安になっていた私が度肝を抜かれるのはその翌日のことである。

その3（後書き）

異世界に行ったらヘル〇アスパークリングだって美味だと評価される……といいのに。

大学の講義で体育方法学取ったら科学的ダイエットについて講義されたのはいい思い出。

その４

異世界と日本では時間の流れが異なる。これは勇者一行に呼び出された時に学んだ。相対的に異世界の方が流れる時間が早いようだ。

といってもそれは一定ではなく、こちらで一カ月経過したらあちらでは三カ月ということもあれば、こちらで一カ月であちらでは一カ月弱ということもあった。

なんにせよ、異世界の方が流れが速いということは確かである。

のだが、

「……失礼ですが、陛下のご家族の方ですか？」

「痴れ者め。もう余の顔を忘れたか」

「……最後にご拝謁たまわったのは」

「昨日であろう。愚か者が」

魔王が鼻で笑う。

ですよねー。でもさ、

「魔王陛下におかれましては、一晩で随分とシャープにお変わりになられて……」

何が何だか分からない。

一晩寝て朝食作りに呼ばれたと思ったら魔王が一目でわかるくらいシャープになっていた。百貫デブが九十貫デブぐらいにまで痩せている。

皮膚が余ってたるんだりしてないかと危惧したが、その様子もない。

その上あれほどできものだらけで油ギッシュだった肌も随分と良

くなっている。シミが一晩で消えるってどういうことなの？　ターンオーバー早くない？　そもそも　贅肉って一晩で数キロも消えるものなの？　やっぱり魔族だから？　魔族だから人間と体の仕組みが違うの？　それとも日本のダイエット食品がいい仕事してくれたの？

一瞬別人かと思っちゃったじゃないの。

混乱する私を余所に、ウォルターが目元をハンカチで押さえていた。

「先生にお頼みして本当にようございました。まさかたった一日でもこれほどの結果を出して下さるなんて……！」

っていうか効果出過ぎてて私がドン引きだよウォルター。

なんなの？　魔族って何なの？

具だくさんみそ汁と焼き魚、ほうれん草とじゃこのおひたし、出し巻き卵に切干大根にひじきのつくだ煮といかにもな和風の朝食を準備しながら私は魔族の凄まじさにおののいた。

さて、早速の劇的な効果に驚きつつ、私はその日から一週間普通に三食ご飯とおやつ、そして飲み物を作り続けた。その間にリフレッシュできるストレッチを魔王に教えて一緒にしてみたり、さりげなくサプリメントを飲ませてみたり、さらに魔王の生活習慣を事細

かに観察して記録したりした。

結果、魔族の特性か？　魔王は劇的に痩せに痩せ、ウォルターが感動しすぎて心不全を起しかけるほど痩せた。

具体的に言うと、私が日本から持ってきた体重計に乗っても体重計が壊れないくらいまで痩せた。

現在魔王の体重は百六十キロである。見た目で言うなら相撲取りを二回り太くした感じ。

ここから推察すると、一週間前の魔王の体重は軽く二百キロを超えていたことになるのだが……よく生きてたな、魔王。やっぱり魔族だからかなあ。

「仕立屋が大忙しだな」

自室に運び込まれた巨大な鏡で新しい服を確認しながら魔王がご満悦な感じで言う。

魔王が日に日に激痩せするため、仕立屋がひっきりなしに来ては魔王のための服を作っていくのだ。

持ってきたおやつを机の上に並べながら、いい加減フリーサイズの服にでもすればいいのにと思わずにはいられない。

とてもとても不思議なことに、例えば私が朝食を作った後に午前のおやつを作るために一度厨房に引っ込んで戻ってくると、魔王が少しだけ痩せていたりということがあるのである。たかだか一時間や二時間で何が起こっているのかと疑問だ。甚だ疑問だ。

「最近は目覚めもいい。気分もなかなかだ」

「それはよろしゅうございました」

上機嫌のウォルターが言う。彼はこの一週間で随分と顔色が紫色になった。体調不良かと思ったが、単にそっちが元の顔色らしい。

魔王の目覚めが良くなったのは恐らく寝酒を止めたからだろう。いや、シジミのみそ汁効果かも。それともセサミンか？

アルコール供給の停止で何か変化があるかと思ったが、魔王は酒じゃないということすら気付いてないのか文句も言わず、肩すかしを食らった気分だ。アル中になっていなかったことは幸いと言うべきだろう。

なんにせよ、健康状態が良くなったのは良いことだ。

魔王も痩せることが嬉しいのか、毎日新調した服を着ては鏡の前でそれをつくづくと眺めている。

以前は巨大すぎたせいでボタンにしか見えなかった胸元の宝石も、随分とスリム（当社比）になったため、ちゃんと宝石として認識できるようになっていた。

そう、魔族は何故かみんな胸元に宝石がついているのである。めり込んでいると言うべきか生えていると言うべきか。宝石の半分ほどが皮膚の表面から覗いている。そのためか分からないが、基本的に魔族が来ている服は胸元の宝石の辺りだけ露出するようなものになっている。服に金具をつけているせいか、一見ブローチにも見えるのである。

魔王はピンクダイア、ウォルターはエメラルド、厨房の魔族はオパールだった。

りっちゃん（勇者）は私に報酬をくれた時に倒した魔物から手に入れたものだと言っていたが、もしかして魔族のブローチもどきをいちいちはぎ取っていたんだろうか。ボタン狩りってやつかしら。近頃の若者って怖いわあ。

しかし胸にそんな貴重品をつけて歩いているんじゃ、弱い魔族じゃ宝石目当てに狩られそうだ。魔族も大変なんだなあ。

という私の考えが間違っていると言うことは、その日の昼過ぎに判明した。

その衝撃的事実は、私の若干シモに走った疑問から発覚した。

昼食からおやつまでの短い休息時間に、私はウォルターと今後のことについて話し合っていた時だ。

「陛下って部屋にずっと籠られてたんですよね？　トイレはどうしてたんですか？」

今でこそハート様くらい（かどうかは知らないが）動けるデブとなったが、私が最初に謁見した時にはどう見ても脂肪の塊に過ぎなかった。椅子が壊れないのが不思議な程だったし、あれだけの量を食べてトイレに行かないというのも変な話だ。尿瓶？

するとウォルターは妙な顔をした。

「トイレ、と言いますと？」

そんな返しが来るとは。

私はいささか気まずさを覚えつつ、オブラートに包んで質問を繰り返した。

「いえ、その、排泄というか……食べたら出るもんじゃないですか？」

あんまり包めてなかった。
ウォルターはしばらくきょとんとしていたが、やがて合点がいったのだろう、くすりと笑った。
「わたくしども魔族は人間のような不潔な排泄行為は致しません」
「しない？」
不潔という言葉はさておき、ウォルターの不可解な言葉に私は首を傾げた。
もしかして魔族は体内に取り込んだものは全て吸収してしまうのかしらん。なんて恐ろしい。
しかしウォルターの次の言葉は私の予想を見事に裏切った。
「我々は体内の不要な物質を卵にて排出します」
一瞬翻訳機能がバグったのかと思った。
「卵、ですか」
「卵です」
魔族って実は爬虫類？
話を聞くとさらに衝撃的な事実が判明した。
「魔族は体内に摂取した物質で不要なものは魔力へと変えて体内で凝固させ、卵として体外へと排出します」
体内で卵の殻を形成するってことなんだろうか。本間先生が体内

にメスを置き忘れても大丈夫だね。

「じゃあその卵を産む部屋っていうのがあるんですか？」

自分でも随分な言い草だとは思うが、他に言葉が浮かばなかった。

「いいえ、ございません。卵はこちらから出てきますので」

そう言ってウォルターが指差したのは彼の胸元に埋まっている宝石。

「……石を突き抜けてくると？」

「いえいえ、そんなことはございません」

言下に、いい笑顔を浮かべたウォルターは胸元の宝石をぶちりとむしり取った。

「ウゥゥゥゥウォルターさあああん！？　大丈夫なのそれ取れるのそれ！？」

慌てる私とは裏腹に、ウォルターは茶目っけたっぷりに笑った。

「ご心配には及びませんよ、先生。これが卵ですから」

「……は？」

私は咄嗟に頭が追いつかずに間抜けな声を出した。

「内緒ですよ。本来ならば人に見せるような行為ではありませんが、先生なら大丈夫でしょう」

差し出されたウォルターの手のひらには、綺麗な緑色のエメラルド（っぽいもの）が転がっていた。
ウォルターの胸元を改めて見てみたが、血がにじんだ様子もなく、皮膚が抉れているという様子もない。少し大きめの毛穴のようなものがあるだけだ。

「栄養素を魔力に変えたところで、魔族にも体内に貯蔵できる許容量というのがあるのです。それゆえ、過剰な魔力は凝固してこのように卵になるのです。魔力の質に左右されますので、魔族によって卵の色形は変わってまいりますが、ある程度の大きさになったら各々の判断で卵を取るのです」

なんだろう、この宝石とても見覚えがあるんだよなあ。
そう、確かりっちゃん（勇者）が報酬の宝石を渡す時に言ってなかったっけ。
倒した魔物から得たものだって。

つまり私が貰った宝石って……

……駄目だ、考えないようにしよう。

「その卵はどうするんですか？」

私が恐る恐る尋ねると、ウォルターはなんてことないように言う。

「非常用の魔力供給に持ち歩く者もおりますが、大抵は凝固した状態からもう一度魔力に戻して大地へと還す者が多いようですな」
「魔力にするとどうなるんですか？」

するとウォルターは少し困った顔になった。

「魔力と言うのは目に見えませんが、大気に満ちている力の源です。特にそれを成長のための栄養源とする植物もありますゆえ、言うなればそういった植物が元気になる、というところでしょうか」

……つまり肥やしになるってわけね。なんかますます気分が滅入ってきた。

いや、でもうん。魔力だし。魔力の固まりって考えたら宝石に罪はない。うん。汚くない汚くない。

「その魔力に還すって自然になるもんですか？」

「いえ、魔族でなければ難しいでしょう」

それを聞いて安心した。宝石を売った相手から宝石が消えたとか詐欺だとか罵られなくて済む。

ん、ちょっと待てよ。

「ってことは、陛下はその卵をお部屋で魔力に還元されてると？」

「いえ。それはあまりにも危険すぎますので、恐らくは室内のどこかに卵をまとめて入れた入れ物があるのではないかと」

……魔王の胸元についていたのは綺麗なピンクダイヤ（推定）。ピンクダイヤって、数百万カラット中、数カラットしか出てこない超レアで、しかもピンク色のものほど価値が高いはずだ。

「……すみません、ウォルターさん。報酬のことなんですが」

「はい、なんでしょう？」

「魔王陛下の卵を頂きたいんですが」

その瞬間のウォルターの表情にはいたく傷ついた私だが、結局ウォルターは私の要望を飲んでくれた。

それは私の小金持ちライフが加速することが確定した瞬間だった。

そして人間として大切な何かを失った瞬間でもあった。

余談だが、魔王が尋常でない痩せ方もそれが原因だったようだ。

魔王の肉体が今までのカロリー摂取の時と同様のペースで栄養を魔力に変えて卵にしていたため、摂取した栄養だけでは足りず、体内の脂肪を魔力に変えていたらしい。

そのため、ダイエット開始から二週間ほどで食事のカロリーに体が慣れた魔王は最初の停滞期を迎えることとなった。

その5

異世界に召喚され始めてから異世界時間で一カ月が経過した。
壁に貼られたグラフを見て、魔王が呟く。

「減らんな」
「停滞期かと思われます」

私が端的に答えると、魔王はぎゅっと眉をしかめた。

何事も数値にして目に見えある形にするとやる気が出るものらしい。
ランキングやスコアやパラメーター、体重もしかり。
魔王を体重計に乗せるのは良かったが、異世界では当然のことながら度量衡が違った。そのためぱっと見ただけで分かるよう、私は魔王の部屋に体重の推移を表す線グラフを作って貼りだしたのである。決して度量衡の計算が面倒臭いからとかではない。
最初のころは面白いくらい右肩下がりだった体重も、二週間を過ぎたあたりからかなり緩やかな低下となった。日に一キロ弱といったところか。その体重の減少も徐々に少なくなっている。
現在魔王の体重は０．１トン少々である。
見た目で言うならそう、牛。胸と尻が豊満な感じのところが特に。まあウエストも豊満なんだけど。目元なんかを見ると、目の上の脂肪に圧迫されて分かりづらいがかなり切れ長っぽいので、顔の肉が落ちれば随分と麗しい顔になるんじゃなかろうかと推察している。顔のパーツの場所もいい感じっぽいし。脂肪のせいで判然としないけど。
魔王の身長が目測で百七十五センチくらいな　ので、七十キロぐらいまで落とせたら元の凛々しいお姿（仮）に戻るはずである。

それにしてもこの体重減少が止まらなければ問題なさそうだけど、現状の一日の食事量を考えるとこれ以上の減量は難しそうだ。

「そろそろお食事の量を減らしていきましょう」

実はすでにじわじわ減らしているので、以前は山盛り十三皿だった毎回の食事が現在では山盛り八皿になっている。あ、末広がり。

「……余に飢餓に苦しめと？」

「そこまで減らしたりは致しません」

飢餓に苦しむほどって私はどんな鬼畜だ。

渋面の魔王に思わず突っ込みを入れた。

「急激に減らすとリバウンドの恐れがありますから。徐々に減らしていきましょう」

なんでもウォルターに聞いた話によると、以前のダイエット担当の魔族が魔王の食事を毎食パン一個に抑えた（といっても一週間続かなかったらしいが）反動で魔王がどか食いをし、体重が激増したらしい。同じ轍を踏むほど私はドジじゃない。っていうかそんなこと怖くてできないって。

この一カ月、魔王には量こそ多いが健康的な食生活を送ってもらったため、肌状態はばっちり、髪の艶も戻ってきた。

「ストレッチ以外の運動の量も増やしていきましょうか。痩せやすくなりますよ」

「ふん。ではそろそろ仕事でもするか」

そう言って魔王が伸びをする。
うん？　仕事ってデスクワークじゃないのか？　してるとこ見たことないけど。私が知っている魔王は常に何かを食べているかストレッチをしているかだ。まあその時しか私がいないから当然と言えば当然なのだが。

「どこかへ行かれるんですか？」

立ちあがって部屋を出る準備を始めた魔王に尋ねる。
と、

「ああ。人間を狩りにな」

魔王がぼそりと怖いことを言う。
黙ってしまった私に対し、傍で控えていたウォルターがフォローするように言う。

「大丈夫ですよ、先生。我々は先生に何かしたりはしませんので」

じゃあそれ以外の人間には何かするってことなの、ウォルター。
私が言いたいことを察したのか、魔王は再び鼻で笑った。

「貴様は異世界の人間だからな。余が狩るのはこの世界の害虫たる人間だけだ」
「ガイチュウ……」

外注？　してるわけないな。害虫か。見ろ、人が虫扱いだ。

「やはり陛下は人間がお嫌いなのですか？」

人間狩りなんてしてたら、第二第三のりっちゃんが来たりしないだろうか。っていうかりっちゃん本人が来たらどうしよう。鉢合わせしたら気まずいなんてもんじゃないぞ。裏切り者呼ばわりされても仕方がないくらいだ。

私の質問に対して、魔王は眉を上げた。

「お前は家を白アリに食われているとして、それを喜んで殺すか？厨房に居るゴキブリを喜んで殺すか？」

「……いいえ」

「では駆除しないのか？」

「いいえ……」

翻訳機能は割と適当（私の脳内にある単語からフィーリングが近いものを選別するらしい）なので、白アリやゴキブリに類似した生物がこの世界にいるか謎だが、魔王の言いたいことは分かる。

「つまり人間はこの世界に害をなす、と？」

環境破壊、エコロジーと言った単語が脳内を駆け巡る。

人間を殺せば地球環境の破壊は止まる！　と言っていた中学校の頃の同級生を思い出した。そんなことできるわけがないだろ倫理的に、と突っ込んだものだったが。

「まったくもってその通り」

魔王は苦々しげに吐き捨てた。

「我ら魔族が不要物を魔力に還元するという話はウォルターから聞いたであろう」

「はい」

私が頷くと、魔王はため息を一つついて再び椅子に座り込んだ。
「貴様のいた世界には魔族が存在しないと言ったな」
「はい」
「貴様はこの城ではウォルターが付与した能力を自在に使っている。しかし……元の世界に戻って使えたか？」
「……いいえ」

私は首を振った。

この世界では冷蔵庫と空間を自在につなげ、調味料も水も思いのままに出せた私だったが、確かに魔王の言う通り、元の世界に戻ればそういった能力は使えなくなっていた。
異世界には異世界の自然法則があるのだとばかり思っていたが。

魔王は憂鬱そうにため息をついた。

「基本的に、ある程度知能のある生物は魔力さえあれば魔法を使うことができる。人間も魔族もそれ以外も。しかし魔力がなければ魔法を使うことはできない。周囲を漂う魔力を消費してな」

ふむ。酸素があれば呼吸ができる……みたいな？　何か違うな。適切な表現が浮かばない。

「我ら魔族は体内のエネルギーを魔力へと変換することができる。我らに及ばない量でも植物や魔物と呼ばれる動物達も魔力を生み出すことができる。しかし人間にはそれができぬ。人間は徒に魔力を消費するだけだ」
「それが悪いことなんですか？」

私が尋ねると、魔王はぎろりと私を睨んできた。

「貴様ら人間は魔力がなくとも生きていけるだろう。しかし魔物や魔族は魔力がなければ生きては行けぬ。魔力を必要とする植物も数多くある。人間は増えすぎた。魔力を徒に消費したせいで、人間どもの住む場所は生態系が狂いつつある」

うーん、外来種の侵略！　みたいな感じだろうか。ブラックバスとかセイタカアワダチソウとか。

「存在するなとは言わん。進化の一形態とも言えよう。しかし我ら魔族は人間などより遥か昔からこの地に住み、暮らしてきた。この世界を我が物顔で跋扈されては目障りだ。増えすぎた雑草は刈る。それだけだ。魔物達も人間が自分たちにとって害悪だと本能的に分かるゆえに人間を襲う。人間どもは我らが魔物をけしかけていると思っているようだがな」

「左様ですか」

どうしよう。なまじ感情とか確執とかじゃない分、口を挟めない。宗教よりも根深いし、利害を争ってのことでもない。

人間側からすれば魔族は人間に攻撃を仕掛けてくる悪だろうし、魔族側からすれば人間は環境を破壊する害虫なのだ。

「……ふん。くだらん。興をそがれた。酒を持ってこい。キツいのをな」

複雑な顔で黙り込む私を一瞥すると、魔王は背もたれに体を預けた。

空間からテキーラ（実家の冷蔵庫を冷蔵室レベルまで改造した）を取り出した私はグラスにそれを注ぐ。
ライムと塩を用意してグラスと共に出してみたが、魔王はテキーラをそのまま一気にあおった。

「陛下、喉が焼けますよ」
「知ったことか」

魔王は不機嫌に言い放った。

その様子を見た私はふと思いついた。
魔王が過食に走った原因は仕事のストレスだったはず。つまり、

「もしかして陛下はそのお仕事があまりお気に召さないのですか？」

私の問いかけに魔王はむっつりと黙りこんだまま空のグラスをこちらに押しやった。私はそれにテキーラとライム、ホワイトキュラソーをシェイクしたものを入れて返す。マルガリータだ。テキーラのままよりは喉に優しい。

そのカクテルも一気に乾した魔王は、一つ大きなおくびをして私を睨みつけてきた。

「人間を駆除することなど容易い。しかし奴らは感情だの知恵だのを持っている。我らと同様にな。余は生き物を甚振って喜ぶ趣味はない。だが魔王として果たさねばならぬ責務だ。責務なのだ」

どこか言い聞かせるような口調に、私は確信を強めた。

今度はウォッカをロックで渡すと、魔王はそれもまた一気に飲み干した。ハイピッチだ。

魔王はそのまま無言で酒を飲み続け、部屋の中には空のグラスが次々に出来上がった。

「……余より人間は遥かに弱い。しかしその分生への執着も強い。奴らは余を憎む。魔族を憎む。我らとて好きでしているわけではない。責務だ。この世界のためだ。しかし疫病が流行れば魔王の仕業だ、行方知らずの人間が出れば魔族に攫われたと人間どもは言う。自らが魔力を使い過ぎて植物が枯れても魔族のせいだと言う。なんでもかんでも我らのせいにするのもいい加減にしろ！　なぜ私が恨みがましい悪霊どもにうなされねばならぬ！」

「陛下、なんてお労しい」

すっかり出来上がってしまった魔王がおいおいと泣きだし、釣られるようにウォルターが痛ましげな表情をしてハンカチで目元をぬぐっている。

なんだこの空間。

そして次の瞬間、私は我が目を疑った。

魔王の頬を伝って机の上に落ちた涙が、一瞬後に黄金へと姿を変えたのだ。

「……ウォルター、私の幻覚かもしれないのですが、陛下の涙が金に」

「陛下の涙は一滴千金に値するのです」

そういう意味じゃない。駄目だこの人。

もしかして不要なエネルギーが宝石に代わるように、涙も金に代わるのだろうか。ルビーの涙みたいに粉々になったりはしていないようだけど。

陛下が泣けば机の上にころころと金が転がる。それを見た私は決意した。

「陛下、私の世界の話をいたしましょう」

なるべく柔和になるように私は微笑む。陛下はまだ涙の浮かんだ目で私を見る。

「昔、フランダースという地方にネロという少年が暮らしておりまして――」

感受性豊かな魔王はパトラッシュとネロが天国に旅立つ頃には両手に一杯の金を産出していた。

その後もさらに追い打ちをかけるようにああ無情、マッチ売りの少女、人魚姫、百万回生きた猫、ごん狐、泣いた赤鬼、かわいそうな象など、泣ける話を次から次へと繰り出すと、魔王は涙腺が決壊したかのように泣いてくれた。

魔王の流した涙（黄金）はスタッフ（私）が頂きました。

泣くってストレス発散にいいらしいよ。カロリーも消費するっていうし。魔王のためだよ。嘘じゃないよ本当だよ！

とかく、根本的な問題こそ解決していないものの、溜まっていたものを吐き出してストレスもかなり発散されたのか、これ以降の魔王の食事の量を減らすことに成功した私だった。

その6

ヨモツヘグイというのをご存じだろうか。

死人の国で食べ物を食べると帰れなくなるあれだ。

有名どころで言うとイザナミノミコトやペルセポネー。うっかり黄泉の国の食べ物を食べてしまった元の世界に戻れなくなってしまった。

異世界の食べ物を迂闊に口にしてはいけないという先人にも程があるくらいの先人である彼女たちの教訓を、なぜ私は活かせなかったのか。

そんな後悔を私が抱けたのは異世界の食材を口にしたせいで三日三晩生死の境をさまよった後だった。まさに後悔先に立たず。

「申し訳ございません。魔族にはいかなる毒が効かないのですが、先生には耐性がなかったようですね」

「当り前です」

客室のベッドの上で私は噛みつくように言った。ウォルターは心底申し訳なさそうに言っているが、もっと早く言ってほしかった。

考えてみればおかしかったのだ。

召喚の仕組みはよく知らないが、どこの馬の骨とも知らない人間を呼びだすだけでなく、異世界の食材で異世界の料理を作らせるなどハイリスクもいいところだ。

味覚の好みもそうだが、ところ変われば品変わる。日本人にとっ

ては普通の食材でも、魔族にとって毒になるかもしれない。ところが誰も私の料理を味見はすれど毒見をする気配がなかった。毒が無効なのだとすれば納得である。

ん？　でもそう考えるとりっちゃんたち勇者は……あれは切羽詰まってたから底まで考えてなかったんだろうな。無事でよかった。自分の料理を食べた人間が泡吹いて死んだら一生もののトラウマだ。

以前はりっちゃんたちが用意した食材も少なからず利用して味見もしていたが無事だったのは、恐らく彼らと私が同じ人間だったからだろう。

初日に魔王の料理を味見して無事だったのはたまたま毒のある食材に当たらなかったからしい。中には人間が食べると一発昇天ものもあるらしいのだから恐ろしい。思わぬところで命拾いをしていたわけだ。

「人間にとって毒のないものを調べておりますので、先生は体調が良くなってから今までどおりの食事づくりをお願いいたします」

「分かりました。なるべく早急にお願いします」

必要なあれこれを連絡し終わると、私はベッドに再び横になった。日本に帰らないと親が心配してるかもしれないと思ったが、まだ体調がよくない。この状態で帰っても心配されるだけなら、あと数時間休んでから一時帰宅しても問題ないだろう。っていうか普通に旅行に行ってるとか思われてるかもしれない。最近特に金銀財宝を売りさばくためにあちこち行ってるからなぁ……ウォルターが元の場所に戻してくれるから魔王城の客室をついホテル代わりにしてしまって。いや、でもさすがに娘が連絡なしでいなくなったらあの両親でも心配してくれるはず……っていうか家事がたまって大変なことになってるかも。帰るのが怖い……

ベッド脇にあるチェストに挿してある白い花を見ながら私はため息をついたのだった。

停滞期を越えてから早二カ月。スーパー冷蔵庫能力を持つ私がわざわざ異世界の食材に挑戦したことには意味がある。

魔王の体重がかなり減ってきたのだ。現在魔王は八十キロ少々。当初の体重を考えると神がかり的な減少率である。そして見た目的にも太っていても美人と分かる程になってきた。元が相当いいのだろう。

食生活も上々。食事の量も普通の二倍弱程度まで抑えることができた。仕事については極力触れないようにしているが、まあ順調らしい。ストレスも程ほどに発散しているようだ。

そういえばストレス発散法に叫ぶというのがあるので、バンジージャンプをすすめてみたところ、コードレスバンジーのお伴をすることになったのは誤算だった。ドラゴンの上から飛び降りるとかそれなんて自殺？　ってレベルだ。魔法で地面に落ちる前に衝撃をやわらげて、さらには飛行して再上昇。そしてエンドレス。本気で死ぬと思った。その後本気で私が嫌がったのを察した魔王は今度は紐ありのバンジージャンプへと誘ってくれた。そういう意味じゃないから。魔王にはバンジージャンプがツボだったらしい。

話が逸れた。要するに私がお役目ご免になる日が刻々と迫ってきているということなのである。

しかし私が使っているのは異世界の食材。一応厨房の魔族にもレ

シピを教えたり味見をさせたりはしているが、代替品が見つからないものも多い。

となると、異世界の食材を取り寄せることができる私がいなければ今の健康的食生活を保つことは難しくなる。

そもそも魔王の好きなコン●ャク畑やチョコレートなどは異世界で作れるものなのか。特にチョコレートは機械がなければあの滑らかさは出せない。それとも魔法の力を持ってすればカカオをミクロレベルまで細かくすることができるのだろうか……チョコレート風味の物体探した方が早い気がする。

それはさておき、そうなったら私のアルバイトがいつまで経っても終わらないことになる。それは困るので、私も異世界の食材を使ったレシピ開発をしようとしたのだ。厨房の魔族たちも決して腕が悪いわけではない。現に私が食材を渡してレシピを教えたら異世界アレンジを加えつつ美味しいものを創り出す。こちら流では砂糖やハーブを多めに使う文化らしい。まかない料理美味しかったです。

が、何といっても伝統や文化の差がある。異世界の民族料理ならば私に勝ち目はないが、彼らの固定概念の外にあるものや意外な組み合わせというニッチなところを狙っていけるのではないかと思ったのだ。

そしてこの体たらくである。魔族ってなんなの。

私が食べたのはネギに似た植物だ。魔族の料理としては割とポピュラーな食材らしい。香味野菜でスパイスを効かせると塩分カットすることができるので使ってみようと思ったのだが、一口かじった途端にぶっ倒れた。

実際問題どれくらい毒物が使われているか分からないため、ウォルターの調査結果が出るまで待たなくてはならない。さすがに味見するたびに倒れていたのでは体が持たない。

もしかして香辛料も危なかったりするんだろうか。舌がピリピリするのって、毒物でもよくあるし。キノコ系は絶対にヤバい気がする。

うう、先行き不安だ。

などと考えているうちに寝てしまっていたらしい。ベッドサイドに人の気配がするので目が覚めた。

覚醒したばかりのぼんやりとした状態で顔を向けると、見知った人物が花瓶の花をピンク色の真新しいものに替えようとしているところだった。前に執務室に飾ってあったのと同じものだ。随分と可愛らしい印象の花があるものだと思ったが。

一瞬お礼を言おうかと思ったが、再び目をつぶった私は魔王が部屋を出ていくまで寝たふりを続けた。

さて、その後帰宅した私は両親が数日前から旅行に出かけており、私が帰ってきていないことなどもちろん気付いていなかったという事実を知る。海外旅行に行くなんて初めて聞いた。

腹が立ったので父の秘蔵の泡盛と母の秘蔵のチョコレートを持って魔王城へと戻った。

お見舞いの花ありがとうございましたと言いながら泡盛とチョコレートを差し出すと、魔王はしばしのフリーズの後顔を真っ赤にしてやけ食いのようにチョコレートを頬張っていた。

その６（後書き）

毎日お見舞いに来て花瓶の花替えてる魔王を想像するとシュール。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6268x/

家事手伝い、異世界へ行く２

2011年11月6日01時19分発行